

P05

当科における臨床実習課題に関するアンケート調査

○森川和政、塩野康裕、後藤翔太、杉山絢子、橋口千種、牧 憲司

(九歯大・歯・小児歯)

【緒言】

患者とその問題に焦点を合わせ、直接的に関わりあう教育および学習である臨床教育は、医学教育、歯科医学教育の核心をなしている。臨床現場で学ぶことには多くの利点があり、それはプロフェッショナルの実践の現場における現実の問題に焦点を合わせたものであると考えられている。学習者（臨床実習生や研修歯科医）は、患者に関わり積極的に参加することによって、学習意欲が高まり、また、プロフェッショナルとしての考え方や行動、態度について、教員を「モデル」として学ぶことができるといわれている。しかしながら、このような本質的な長所があるにもかかわらず、臨床教育には、恒常性のなさや、考えさせる課題が少ないこと、偶然に左右されることなど、多くの批判がなされてきた。すなわち、臨床現場での教育は健全な教育方法であるが、実行の困難さによって効果が弱まることが多かったと考えられてきた。

一方、現在の教育は、過去の知識を『記憶』することを中心とした知識教育から、学生自らが自主的に問題意識を持ち解決する『問題解決型』の教育へと変わりつつある。当科では歯科医療は元来、問題解決型の領域であることを踏まえ、臨床実習中の課題は小児歯科に対して興味を持ち学生自らが新しい課題に意欲的に取り組めるものであると共に、上記の臨床教育の短所を少しでも補うように実施している。

今回、臨床実習終了後の学生を対象に当科における小児歯科臨床実習課題に関するアンケートを実施したので報告する。

【対象と方法】

臨床実習終了後にアンケート内容、実施目的について担当した学生一人一人に説明し、同意の得られた学生（歯学部6年生）を対象に実施した。アンケート内

容は、当科での臨床実習中の課題（国家試験形式小テスト、レポート（2題）、ラバーダム防湿、シーラント実技テスト、パノラマX-ray読影）に対して、①「臨床実習以外の課題を通して小児歯科に興味を持つことができましたか」②「課題のノルマは厳しいと感じましたか」③「指導教員とのコミュニケーションを図ることができましたか」④「指導教員の熱意は感じましたか」⑤「内容は満足のいくものでしたか」の問いに対し5段階評価とした。また、課題に対する感想・意見を自由記載欄とした。

【結果および考察】

5段階評価の上記①～⑤の問いに対しては、ほとんどの学生から満足しているとの回答が得られた。また、自由記載欄（原文そのまま記載）では、「レポート、実習の際の試問がとても勉強になりました」、「質問しやすい雰囲気がとても良かった」、「時間があるときに班ごとにミニ講義をしてくれたことが大変勉強になった」、「国家試験の勉強をしていると試問で聞かれた事が役に立っていることを実感した」、「先生の熱意が伝わり自分も真剣に取り組まないといけないと思い頑張れました」、「どの課題もその都度フィードバックをしっかりとくれたので本当に勉強になった」、「自主的に積極的に勉強していると実感した」、「小児歯科に大変興味を持つようになった」といった意見が多くみられた。今回のアンケート結果より、各実習課題に対する到達度を評価するとともに今後の小児歯科臨床実習課題のあり方を検討、分析することで今後の臨床実習での学生教育、臨床実習課題の確立への一助となると考えられた。

【文献】

- 1) Peter Cantillon 他 吉田一郎 監訳：「医学教育ABC学び方、教え方」：篠原出版新社，83-109，2004
- 2) John A. Dent 他 鈴木康之 他 監訳：「医学教育の理論と実践」：篠原出版新社，22-31，2010
- 3) David E. Kern 他 小泉俊三 監訳：「医学教育プログラム開発（6段階アプローチによる学習と評価の一体化）」：篠原出版新社，47-71，2003